香雲院右兼相口傳

特別
へ4
8140

へ4
8140 貴

紅葉山文庫

慶長二八仲春以来得實條々賞命之案々

題之事

立春 壱し 立春 早春 初春 正月一日より二日数日なり 水屯 初春詩小は
ショシュン 哥小ハリシュント読

海辺霞 訓し
ウミノホトリノカスミ

春雨 訓然よい
ハルノアメ

鴈 訓ゆも 壱すも
カリ

栽花 訓返
ウハナ

尋花 訓返し 冷泉小ハウル至 タツヌル至ト直ス
タツヌル 読給也し 見花同

掛頭巾 訓せ
カケシ

落花 声
ラククワ

暮春（ボシュン）　訓也ヨシ

初夏（ショカ）

卯涼（トウリヤウ）　也シ

六月扇（ミナツキオウギ）

荒和（ナゴシ）　二条家ニハなごしと後冷泉家ニハなごゝかなどゝ後由し

早秋（サウシウ）　也

七夕（タナバタ）　声　タナバタ織女の牽牛と織女とかゝ

初雁（ソカン）　訓声ヨシ

田廉（タノシカ）

社頭月（シヤトウノツキ）　社頭ハ声　月水ナトハ訓シ

古寺月（コジノツキ）　古寺ト斗ハ声セ

停午月（テイゴノツキ）　停午ハ声セ

九月盡（クグツシン）　声　三月盡ヨシ　渭盡　同ジ

歳暮（セイボ）　声

馴恋（ナレコヒ）　訓

偽恋（イツワルコヒ）　訓

増恋（マスコヒ）　訓　逢テマタ恋シ

待衣（タウイ）　声

寒衣（カンイ）　声

後朝恋（コウチヤウノコヒ）　後朝ハ声

顕恋（アラハルコヒ）

悔恋（クヤルコヒ）　訓

旧恋（フルキコヒ）　訓

遇不逢恋（アフテアハサルコヒ）

久恋（ヒサシキコヒ）

寄偶偶恋（ヨスルクウイクウイニコイ）偶偶ハ声し

名所松（メイショノマツ）名所ハ声

山家（サンカ）声

田家（デンカ）声

羇旅（キリョ）声

述懐（ヨモヒヲノブル）述懐ハ声かし

神祇（ジンギ）声二字ともかぞ

釈教（シャウキャウ）釈教ハ尺教のうちより

祝　祝言ト二字ハ書てもいかゝともへし

早春到（サウシウウイタル）早春ハ声初秋の巻し

花洛月（ハナノミヤコノツキ）洛月

原上霞（ハラノホトリノスミキ）

庚申夜友（シカノコエヲヨルノトモ）

毎夕待恋（マイセキマツコヒ）毎夕ハ声し

忍會恋（シノンテアフコヒ）不逢恋

鶏声何方（ニハトリノコエイヅレノカタソ）

述懐恋（シツクハイアラスヒトツニ）

照射（トモシ）夏の巻し

炉火（ロクハ）ふゆし

初冬（ハツシメノフユト）初冬ハ

雁（カリ）雁ハ菊二字トモ（カキノザンキリ）

菊（カキノコノイキリ）菊ハ声ニヨムトキ

擣寒衣（ウツカンエヲ）寒衣ハ

エラチトヤウヤウ

冬暁山（フユアカツキノヤマ）

返書（カヘスフミヲコヒ）

待空（マツニムナシキコヒ）

松為友（マツヲトモトス）　友説トモタリ

山村煙（サンソンノケムリ）

月前雁（ツキノマヘノカリ）　ソカンヒ

乞巧奠（キカウテン）

猫素見月（シソミルツキ）　僧俗ともに月をこゝ俗も月をこゝ

水急躑躅（スイキウノツツシ）　如此説ひ乳路水也ハ声し

荒屋（クハウヤク）

疎屋蔦（ソヤクノツタ）

黄菊（クハウキク）　声し又二字ヲきくトヨ

高人聴月（シャウシンチウツキニ）　ヒノヽ

寄月顕教（ヨスルツキニケンギャウ）　大抵顕ハ天台し但顕の中ニ密アリ密ノ中ニ顕アリ

寄月蜜教（ミツキャウ）　大抵い真言の清

月前星（ツキノマヘノホシ）　餘准之

九月十三夜（クワツチジウサンヤ）　ナカツキ。

死暁鐘（シナノアカツキノカネ）

隠在所（カクスアリトコロヨコヒ）

早雁（サウガン）　堺川院和歌所百首の歌し但西文歌ノ所本ニハ早字なし

未通（イマタカヨワサコトハヨコヒ）　サル

来不留（キタレドトヽマラサルコヒ）

漢舟連波（キヨシウナミニツラナル）

江雨鷺亮（エアメニサキトブ）

山亭人稀（サンテイヒトマレナリ）

元日宴（ゲンジツノエン）

野遊（ヤユウ）

遊糸（イトユウ）

志賀山越（シガヤマコエ）

嶺林猿叫（ミネノハヤシサルサケブ）

寄レ歎（ヨスルケモノニコヒ）

賭弓（ノリユミ）

雉（キジ）

遅日（チジツ）

三月三日（サングワツサンニチ）

九月九日（クグワツクニチ）

鵜河（ウカハ）

夏衣（ナツノコロモ）

野行幸（ノヽキヤウガウ）

寒松（カンセウ）

佛名（ブツミヤウ）

新樹（シンジウ）

残春（ザンシユン）

鹿沢池眺望（ロクタクチテウバウ）

枯野（カレノ）

推宋（シイシン）

閑月七夕（カゲツシツセキ）

古渡（フルキワタリ）

屋上朝霞（オクジヤウニキリアラレヲ）

忍靄眺（フシンシウヲ）

河上氷（カハノホトリノコホリ）

詞和不達（コトバヤハライテアサルコヒ）

連峯雪（レンホノユキ）不云（レンホウト云）

盧橘（メナハナ）（ナタナバナモ）

疑真偽（ウタカウニヨトイツハリヲコヒ）

紅葉深（モミチアサシフカシ）

陰夜燈（ショヤノトモシビ）

落暮（ハリボ）ト云ハ夕ト斗ヨハあ〜れ

題ノ字不可勝斗大概以右ノ訓例可推之也

一兼四ら〻詠草

たてうく（縦）に口を形（ぎ）を玄（ゑ）ばさけて（下）俗ハ実之（手）

俗、入道ハ緯（イミナ）ぎうをかく（懸）所ふとゝ不書し貴人（殿）月よかく

ふ玄祐上と名の下にたゝへ（ヲ）ゝ上文字をかゝ（カ）せさて（相）真名を

書（カキ）所を二ツよ下（下）ケさて（下）て影（ヒ）三首と云へ〻二

首之首の影なり〻ふ又影をうゝ如右二ツよ所をかゝへ〻

また（又）玄の書の詠歌を二玄よ所かゝ（懸）るよあ〻は

さゝ〻みふ別〻ふ二枝ふさへ〻位（シ）持（ち）て〻てんセア（ス）

に玄ハ歌に南玄の詠歌のこと〻もかゝ（書）さや〻（尤）の時ハ

奥口の帯一を打帯の表裏にもうく甚特ハ裏ハ
うくかの影の口に名をさかハ及せられいろまも
器し

一當座く弥栄

打ホを中を二枚とり取打帯すして口の名影をハ奥口
の紙のごとくハかをハ一首なりとも三首なりとも
二ツ七字よ書へし影を二ツ三ツ取あるハ影の
ハ中をかり別しく略ハ影を打帯うくにうきかく
かと為く次の影をうきく帯一先ハ帯をハへ
し次の影次中不審ハ影者ハ多ハ四十五ハ
題の後やくもなしハ知をハ影者ハそふへし上のうくに
ハ後こなひあるハ中のうくに書ハくハ月ハう

け帯をさくひとへ

一懐紙

ハきあるハ合ふ口を我ハをかをよ秋ハ秋口
同弥二首和帯と紙の上より一寸ハとあけてうきハ主人
貴人のまへまハ舎よハ秋口同の三字をハ不書紙の上
より二寸ハうりさけ弥二首和ハうくへし入道ハいつく
にても春口同秋口同ハの三字ハ不書やさて一寸斗か
くハ俗ハ主人ハ従ハの所舎ハ官ハ官職名ハをハ但ハ官
の所ハ公家庶禁裏ハてハ姓をあきハさぬし當官の
時も禁裏の外ハてハ氏をあきハさぬし官の人ハ
姓名ハをかくハれも名ハよハ姓を不書入道ハ俗ハ宗
祐と書宗祐と斗しかくハ俗ハとハ二字ハ公家庶の所

歩そをは早下せ平人の出は早下なるぬしおく
くは源字出るは源字より出字をうりさげく髪をかく春
四同なとかくは春字より一字をうりさげく髪をうくし
さて髪よりかくは髪より一字あまりあげく前をうき
前の下と和前の歌字の下とかゆ月やにく仮出て
うのさうもあるは不芸なのかくは又髪をうきなをう
くし二首三首は二行七字せ七字とは下の句の末の一句
し字は五よりもこにもうせ

一首の時は源草花掾露和なと髪を口に出和なの二
字をかく奥へ寄せく名とは前にくまた長き髪の
字を二字三字もかく奥へ寄せく和なのくはもうく一字は
ささるせたとくは

秋四同源草花掾露　和なは髪なの字と同首は
とせなりけてもかさうりて
和歌もふな

重陽四同源雛菊節　髪字並二字は六寸三字も
髪の字一字は出こさ

秋風和歌ぬねし

和奥は名をうき名を三行三字より三字と字はうりて
もそも三字せもからうきに出るねし芸うるともなる盛むとも
又かきまなと二字つくは不芸こ三首の時姓の髪をは源水
鳥和歌とせて三首とは不書して名をうき名をうく事
もはりたくのつはにりてのなりは特和歌の二
字を奥へはせすてもたにもし髪は自筆のもせ和歌の
なの字序半をかくるる平人はるもらし乱元も人よりて
てあそは寸し侍字うくも平人はるるすし婿もるるせ

懷紙のうへ（紙）もけうきるるとうや手へいうめけをつめて（短）あつ
くりとかくへ（古）そこ（廣）ゑろきい不（ゑ）九首七首の時い懷紙をつくし（後）
懷紙ようく（古）藤原ホの姓い藤（め）ふうきこかりづく（作）と字のやうにうく（古）し
短尺ホ懷をうくしともあり

一首の時三ノ三字ホ也ようい二条家い姓の二ノのうら（中）へ下句を一字も
二字もそくくうく（古）のうりナ二三字を一ノ三字にうく（古）や
冷泉家にい上の句を二ノ（ふうき）（古）下句を一ノ三字にうく（古）や
三ノ三字の三ノのうし二ノ七字の二ノの下しそうら（ていい）不也
おし目よまくぬ（不之）ぬ後あきをとうけてさへ〳〵但不注の前の懷紙
ホ裏よ注をそうおし也時ハ下しそうら（ていい）（古）〳〵ゆまし
上をふそうら（ていい）（ホ）ようり
懷紙のうく（前）二そうりれそまそ（也）ハ二ノ七字にさし十首ようハ
二ノし

一首の髪の懷紙ハ一字の髪をそうも和歌の字ハ（奥）ホ（家）へ下もて
（可）（古）へ〳〵

詠花

和歌

三ノ三字の時姓の二ノハ十字九字八字にも七字ようホ
ハうく〳〵ハ但ようを（奥）（名）ようをすて（文）ハ七字にもあるなり

一懷紙文墨に玄板

懷紙を縦巻〳〵首を一寸四五歩もれく首を袂に下の方
をうう〳〵ようやうに（成）袖に入巻〳〵て下筆より指出ホ
おし出さるに左の袖より元出〳〵下座の方の口よりて出〳〵
ひ〳〵きこて（見）め前すきて首をれてうう（方）多〳〵まうホ

やうに左手を上、右手を下にして懐帋の上下のゆるやかに
匂めゆるして扨文臺の　半後こゝに長さ　膝行
〳〵懐帋をこなすなり　左手をうき右手にて懐帋
の首の下をへなすやうに文臺の左らのたのうへよりをく
なりさて貴人をうしろへせぬやうに辺らきうつし
二条家ハ懐帋の首をうろ冷泉家ハ扨てひつ
〳〵なり

一商座の短冊の事

短冊を三ツにをりサ首し三ツ首し中首し箱の蓋よりを
巻既巻畑をは惣の上に匂うへをく也扨貴人の所前へは
をくなの蓋匂ハ扨まいりてをくを申て文臺をきうる
時ををくやうに下前ハ座より出て懐帋ををく扨のごとく

さゝりて右手にて短冊をとり懐帋へ退へ巻既巻
畑ハ貴人扨ての扨ををくし御ものをへ既短冊あまり
匂〳〵ハ貴人の所意よりをくあひ交こよ出〳〵ゆ紙く
料勘すをく　ををくすをひき次よ扨原を上座より
くし中より二枚を二ツハ扨て御原ををへ〳〵也て紙を
中より包ものや

商座の短冊ハ右手を用ひ冷泉家も同る
包島井ハ右よ〳〵〳〵せををををををや所ををををる
後をを〳〵短冊よ方ををををををををををををををあ
けて下匂をさけをを〳〵〳〵をををををををををををを
に貴人を真にてかへ〳〵貴人の出座の時ハ下前の
俗ハ短冊にも姓名を書をるをや摂家清華其外

大臣は所あの氣の舎人は堂上の六位も短冊かも姓
をうくるなし但四位五位の堂上の流は數上まても短冊
は姓をうきくるなり氏を注短冊二枚も三枚も始の名
を上ゆ〳〵次第ようさ初〳〵名の方を下にして三ふ
れ名の方綱〳〵のち上座より初〳〵出めおさ〳〵より左
手をつきた手まて短冊を箱の蓋ふをき退也然時し
貴人の所へは箱のふたをもてまいりをもーや
さて読上のときは家の奇を頭をさけ僧て坐〳〵や二条
家は短冊の名を下ふ名のうを上ゆて被て上座
まそよむや〳〵に前のうを下座へなるやうまるや
奇をうき付家も名を下にして字数を下座へなる
や〳〵にをくや但勅名の時は二条家も名を上すして

れと云説あるとも二条家は勅名も名を
下にしてれと云れ〳〵をれ〳〵二十前三十前の題の次
第よ是れは天子の所爲平人の爲の来よりはつ勅
名とは勅筆の名や
冷泉家よは短冊の名の方を上すして三つよれひら
きて上座へ御覧するやうに爲の前の下座へなるやに
もなりをくは時も其ことくや名をそやくえるへきなり
めとや冷泉家の出名ふそも二条家の爲人は短冊の名を
下にしてれ我流かをくへし
云家流の所前へは短冊入る蓋を持〳〵まるや其時我所
覧せるるやうをるるやそれも天子の御前まそは
うふもち出座へ所覧するやうにをき給やをとも

ときゝの内舎人も　天子の内前の警古のゝめ拍出ゝ
給ふ時ゝ内覧するやゝにをゝゝや又内前へふゝ
をもちてゆくる時ゝ伝示のときゝは上達へ内覧するや
にをきゝぬまゝ召れも二条院い髭を下にゝゝ
なり

一懐紙短冊

いろまてもその口筋上する時い短冊をはゆれ墨をあゝむ
けて入墨の上ゝをきゝ又前の墨に不入して文墨の上小も
をゝゝし

一短冊書る

上ゝ髭のある時い下の口をさけて髭のなきをい下の白
をサゝゝさけて書也但伝の内製と女房の所い上小

髭あれも下白さゝるや又ゝゝ上ノ白さけさる
あれも不用や
たとゝい雪月花を五人ゝして筋ゝい十五首ともに短冊小
髭をゝくるかなれも暗ゝして雪月花各一枚つゝ髭
をゝて書おいゝゝぬもあるや世時い上小髭なきゝ
下白をさけさるや

一小短冊我うけの短冊とゝるあるゝ秘事ゝ

一三位三官の人い懐紙ゝも実名ゝるゝかゝなり但貴
人の内前ゝもゝい姓と名乗を書へゝ三官の二位三位小
とい二位雅朝三位氏成なるゝあるゝや三位三官
の元堂上ゝなりゝとも大中納ゝものい名ゝもゝい姓名乗ゝも
にゝゝや

秘ニカ

一秋田同の同ノ字をうぬ（不也）ぬハ（ヤ）ぬ〳〵墨や

一懐紙ハ上前次第ノ上にうぬぬるや、俗入道の希今の懐紙ハ入道二人まて（迄）ハ一同のようぬるし、三人よりハ別のようぬるなり、百人より多人数も三ようのようにして不苦、入道一人二人を別まはせぬこそ（後）うさぬてのち二ツハ小ハ口の方を上にして頭を下ゑへ（向）て文臺の上にをく（置）や別のうぬるぬる入道の懐紙も上前をうぬるし

一南庭の短冊ハ彩の次第ノ如て頭を下ゑよ（向）て花の臺を作りけく（様）入道し冷泉家よハすく（限）もれの臺を安て上ノ上ノ短冊ををく（置）とし、二条家よハ不用し

一懐紙ノ書ノ事

一首の時ハ秋田同（アキノヒオナシクヒ）弥荻（ヤハギ）知秋（アキヲシル）和歌（ワカ）入道のをハ弧（ヨル）

林柴（キリヤウヤウリキシ）衛黄（エイコウ）和歌（ワカ）なるもよむし天子のをハ弧の字をよませ後つと後や常の名なも貴人一百人出座の時ハ弧の字を後へ後へなと後へきにしかせ後つとハ天子のをハ次ノ作者を後次ノ名をよむや作者をハ第一賞歌をハ西園寺（園ヒ）なと稱号をよむ歌の字ハ次ノ稱号を官家てよむ次ノ名乗に姓戸を除くよむ次ノ姓名乗并を後や二首三首の時ハ弧（ヨル）二首（ニシユウ）和歌（ワカ）と後次ノ弧をよ（後）ミ次ノ作者をよ（後）ミ次ノ名をよむや又弧をよミ次ノ作者をよミ次ノ弧をよミ次ノ奇をよむしつれもあるし世次

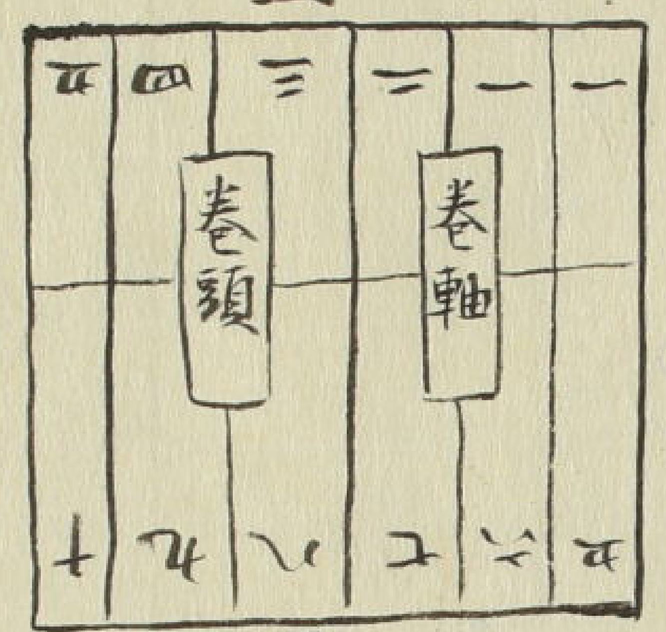
まは又鼓をよこ笛をよこすると何首も同じ〳〵なるし、
懐紙只後上の時い上前より後琴の時ハ下前
よりとむし
俗入道の懐紙別す〳〵言を後よい入道ノよりよむ
し首も其外上前下前の分別ハ右のごとく
懐紙をよむよ上を後てハ右へ〳〵〳〵〳〵一の下
の懐紙をハ右へ〳〵〳〵懐紙ともを
本のごとくに右へ〳〵二よ折せ
短冊後上するよハ右より右の手より〳〵短冊の鼓を
取左手を先やりて取て取直し右手より
短冊の中ほどを指をの〳〵下よりうつるし
右手より〳〵短冊の方をハ左脇をうつ左ようまして

髪をよこ次よ作者をよこ次よ哥をむなり後るる
短冊をハ右ほとを惣の短冊の下へなし〳〵むし後
て取なを〳〵め本首をハ下後〳〵〳〵家是ハ〳〵鼓琴
の時ハ短冊よ手をつけすてさのさ中ふ〳〵て安座
〳〵よむしさ〳〵ふる時後師の方をうつ視てし
し後〳〵る短冊をハ後師〳〵えたはこれもちの下
の一枚をハ之さ〳〵て始うて〳〵る短冊をもを
のごとくなをたし
鼓琴の時よこ笛あけ〳〵るおい鼓琴をる志鼓
琴〳〵ハ助言をるとも其云〳〵ハ〳〵後師も
云言し
性よこ笛あけの時ハ前上ノ方を後腰よて用をき

下句を讀發聲の時ハ五句ともに一句つゝよミきり（切）
間をおくへし
中院殿称明院殿なとハ天子の院號の跡に居せら
るゝ故に讀上の時此の字をはねて称明みなと
よむる故也
公家の御子息をは西園寺殿作者なとゝもいへし
一懐紙短冊なとに次第の座を二人とそろへる
座を下と斗云もよし
一硯箱の蓋一首よりそこさる時墨をすゝらぬ
先ずそよたふ小紙を前に清書しても出時清書の
次第よく清書しくにみすへし

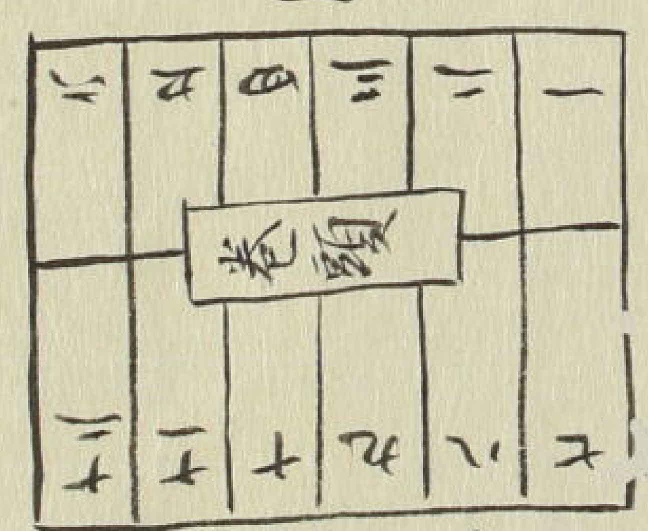
一短冊箱の蓋よりの時巻頭巻軸の事

上



下座

上



下座

巻軸の時

一高座短冊より硯箱の蓋の桐めてしや

上

下座

清ふ菊なとのまきゑある時上下をまよふ又めをきかすとも杯といふあり中のしらへし

一讀短冊とはかくしよも短冊一清き奥書なとあるをよくしくハ紙を一枚つきて作者我々の哥を
かくして人あまさる故短冊にすこし短冊をつく

公持をゝ〜上の句を中くらとして古ことゝるハ略也〜
て短冊ハ上の句を中くらとしてゝ〜ゝひし
一懐紙後上ゝゝよい文字ハ大なるよ〜字
題の方を高おろ〜ゝ逆にはゝ〜被て
よむ方にて奥をゝ〜さくゝ方のよりそかゝり〜よむし
二枚めより下ハ作者と名ハうよむし後後てゝ
二つよ打面ゝゝ〜ゝ姓名文字よをゝくし
一葉裏ゝて懐紙よゝくあけ
公家の前ハ称号皮ゝ戸ハ原て
五位の人ハ実名ハうよむし連句ハの時ハ
也〜〜葉裏の懐紙ハ公卿五位ゝゝ姓戸
ゝよゝくし実益ゝ実際ゝ家別羽ゝ

益後五位ゝ殿葉中ゝくゝるもあ
常ゝ和名ゝ書ゝ市井の附ハ公卿四位五位と
ゝ称号皮ゝ文字をかく
一詩歌の名ハ曉庭 古渡 花間 月と行の名ハ
彩ハ〜
一商売の部の中にも同部を三ツ又ハ人数後
ゝ〜ゝ其外ハ別ゝの部もあるし其同部の短冊ハ
句論上前のと上ハゝ姓平部をむ
次ゝゝハ作者と名ゝゝ後ゝ
一商売の部ゝハ題二ツを口ハ〜ゝ奥ハ名を
ゝき名をつけて出ゝ奥ゝ名をもあり名ハ
名のハ口ハゝくゝゝ本し此ハ平人ハ〜ゝゝ

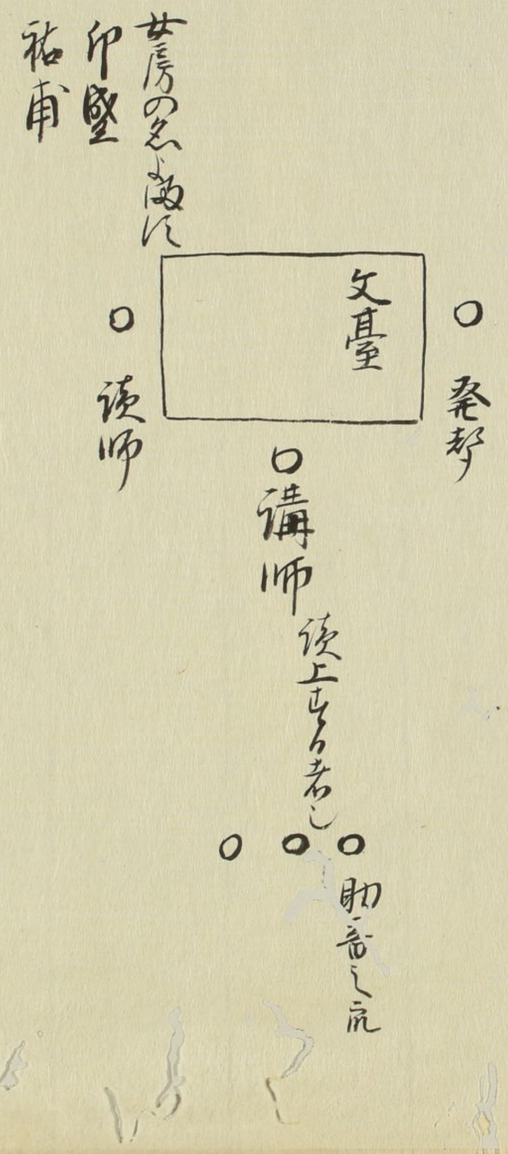
ゑの御まい社ゑのとうの裏ふ名をうくるなし口ふ
てもふ苦

一鞍掛短冊

上の鞍の下ゝゝ上句を作る後中ゝゝそうく十上句
下の鞍を出切へゝふに下ノ鞍の下まは二字と三字と
なし腦の文字出あまりに上句下の鞍の上の
きハまて出うけてあるハふ鞍をのこゝゝるやゝに
こゑさるやゝふ出やゝ下句を用ひふ上ノ鞍の下より出て
下の鞍の六字上まそうきとむるし名をハ下の鞍の下
のきとうかゝへゝふの上の句とまりよりうゝ
ゆうるやゝにかゝし鞍とき不苦しれやゝふ上の鞍
の上と下の鞍の上と分中後つゝ上を用ひれてはこゝふ

をる已上四ふをなし下のうを一度用とうゝうき
やゝにれて下のうを上をふゝてするし
慶長十七年十月十日西堂御所裏ハ唯公宴後
於井敦盛と云者の時の鞍掛の短冊寸法
七一尺ハ寸ゝ一寸八ふゝ中上の青雲の
鞍ハ上ゝ三寸ハ分下ようゝ下の紫雲の鞍
ハ下ゝゝ一寸八分上ふくるし金の鞍しふハ
此首ゆゝゝし
中ハ二条ゆゝの短冊ハゝ一寸八分しかゝ度狭ハ不苦
一寸九ふまいはするし

一板講ゝゝ



先読師文臺のきゝうあ座す次ゝ読上すゝ人ゝ座て
あ座し次発句をゝ人ゝうてあ座す
懐紙を二条乱よい下前を下ようゝゝて読師うえ
ゝ取て初ゝけゝくさゝ白ゝ読上ゝ下に文臺の上に
ゝくさて読上発句の後又うゝゝてをきゝすゝし下前

のようにむし俗入道の糸書よい入るの懐帋ようむ
入るのごとくに下前のようむ入るの懐帋三枚も
又枚しようにて〳〵こて懐紙のを下前ようむいろ
れし二ようにて袖し強上せぬさきは須師の右の
脇に懐帋いるくし冷泉家よい下前のをうへよき
ぬて中ようぬきおし下前の懐帋ようむし
右ようにて発勢ありの時のもし
一新うけ短冊の乞い下の部の下のきたようの二の
句のきとりすすこさうやようへきし同笠まい
不苦し
一品種の懐帋のいろの下と字の下を同笠ようへ
和字の所の字の下しひときつの記しぬして字の

圖
たけ蜀を出〳〵うくすうすあるし
一一人して百首をむい狗吟と云多人してよむい須所を
云し又一人〳〵五十首須を懐帋よむをも
はき字五十首とりし姓の五十首し百首の部をの
懐と引あるをかいあるひとのちよ五十首須〳〵
よりて懐のをいつき五十首とりし
一新をよ対く人よりやうの短冊を四ようをこ所
つかりて懐をぬよりやうにすす
一詩字の會の時詩の懐帋のこ事

賦題〳〵

詩一首 梅字韻 韻 めを字の韻うの処よ出て貝よ詩を出へし
東然 韻よい影のごとの字をきし必仕の四句の韻ふ
むへ〳〵字和歌の詩い字の韻を仕の
三の句の韻まも文むし句角四ノ句の

韻を踏まずし

大伴宿禰仲春賦　春日賦有と賦字を季の上よりよへ〜

待の懐紙の一首也　二首三首ハ不及之也

一短冊の部

霞一　紀六郎　三月五　紅葉二　雪三　不逢恋五　旅二　山家二

祝一　以上世首也　同部五六首しいてしるすは同部

同月のうちとは懐紙の次第に上箇を上にうさめるし

如しいの部の次第にうさめるし

須とハ同部をを一の上の短冊ハ作者名をよむし

次ハ作者とをいハ須部ハ同もよまに

一部紙の懐紙　部紙と懐紙旧と二首もよむに部

の名とは部字の下に書し奥の懐紙の部をは常の

二首三首の部のごとくよりくし又常の二首三首の時

口の部とハ部の字の下にうくるもあり部を部紙の時

うくるより不好しろれもあるもあきらかハ不好し

一板講しる懐紙を下箇のと下より主二つよりて文部の

上よりくし先須師さしてして文部の右よりあ座して

須上する人を目つひとそ〜に須上する人サ礼の部持

ちて〜文部のまへ〜ようしる上座よりひのひてあ座に

相発声の人ひて文部の左の方にあ座す相須師

文部の上ひ懐紙を部かろ〜我右よ部下樂の

懐紙のをうえより取ひ〜きて文部の上ふ字部を下

をくして部ようと上する人懐紙ふいまも不付〜て

さうゐふ向須し一首の時ハ春日同部数を家和歌人名

ゐとゝむ和歌を発句すること二首の時は秋口同絵二首
和歌作者名記ゐ名記ゐとゝむ和歌口の句を発句
し同(月)次の句を発声とゝるし記作者の名発声はなき
わし賢人のし用すし絵三四人は俳句にす二首ゝ
句をあけてすしきゝおさめの一首をを絵のとゝむ
きゝ発声すし甲乙丙丁の順ゝあり後上七二枚めう
下は作者とゐゝうゝとゝむし記はよゝ八通記の如し三
その時ゝ後上発声二そのこゝゝ又二首三首の時後上を
四ゝ和歌と後記をゝゝ作者をよゝ奇をよゝ句
を後ゝゝあり
一句絵の懐紙
多分句と懐紙と二首後しゝ時は句の名をは絵の字の
下は和歌とゝふゝて一首ゝ出作者名の句のうち
の発句を記ゝ奇をゝうゝ又発句を出句をうゝ
ゝゝ発句を三首又は五首後ゝすしあり其時
ゝは句は絵何品和歌とゆくし三首五首とは不可出
一七夕ゝ墨ゝゝ同ゝすし
一短冊をゝむゝ同作者二三枚つゝきゝゝ名作者の
名をゝむゝ
一懐紙は句をゝはゝ出ゝ数絵とゝ出ゝ
句をゝゝてのゝすしたゝくは大長しその句し絵ゝ波を
数絵とゝゝはあしし
一懐紙ととゝて御製をはゝきゝて奥のゝゝゝ弦ひ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝし

一懐紙のとち板
二条家より紙数多きゆへ
をつまちまをそろしこちはとれふとむこまを
とち入へきしるめし
冷泉家ふい紙うたを多かふりにつきくとちし
こまむすひよとむし又とち入きくるめし
一短冊くるま
三十首をそい一とち又十首百首ふり二筋をあ
りの深さうをかをそふてはくとをとちめ
ハ上ハ乱の字の上のきをし横ふ中し水引を順よ
まをを一重よむすし口れをせた結ふ処ハ短冊の
つきくまをを て角よ三ヤふもくろきあるヤふ

内むとをに
一短冊二百首とある時二よくくるふハ来のをうにめ
ふきハあるし
一兼日の乱をハ翌日記よりてまは短冊に前を
ゆく時ハ作者乱ををうくし其時指をつるヤ短
冊を悔ふくをれめヤにて左枝ふ入金紙附
反出下座の方に向て脇ヤるめヤに押出し
懐紙ををもちゆるやくに指くそ元中字
乱を下にして第のくふ変て退し又前座の短
冊のヤふ三ツにをとれ折めれ付めヤに折指く
出をを変頭上ハ前座の短冊と同く但面ら乱
なををハ二度目ふハ乱をよをめし元和元年

九月廿八日　西三條殿御令めにて
短冊ふ作者部をかゝ事りの懐紙の代し表向の
事ゝはあゝ之ゝ

右一冊以大和国多武峯寿命院蔵書写之の秘ゝ

依家実卿命御書之　縫女房　曄子ゝ写之

寛政七年十二月九日　権中納言資矩

這一冊以日野黄門本写之ゝの秘ゝ

同八年三月十七日　三位資秋

茲香雲院右相府実條ゝ口傳一冊者乱筆
三位実秋ゝ所持ゝ本逐模写ゝの秘ゝ
寛政九丁巳年閏四月十四日　刑部卿野宣義
午刻発筆　入夜之斜終ゝ

久曾神藏書

A2